

## 心毒性

乳癌の治療に使用される薬剤のうち、心毒性を有する薬剤で代表的なものとしてアンスラサイクリン系抗癌剤が挙げられます。アンスラサイクリン系抗癌剤の総投与量と心不全の発生頻度には相関がみられております。したがって、総投与量としてドキソルビシンは  $550\text{mg}/\text{m}^2$ 、エピルビシンは  $900\text{mg}/\text{m}^2$  を超えないように規定されています。また、総投与量以外にも、心疾患の既往の有無、年齢、胸部の放射線治療歴などもリスク因子として指摘されております。

また、分子標的治療薬であるハーセプチンも心毒性が報告されており、とくにアンスラサイクリン系抗癌剤などとの併用において、心毒性が上昇すると言われております。しかし、ハーセプチンによる心毒性は内科的治療によく反応し、左室駆出率も改善すると言われており、アンスラサイクリン系抗癌剤による心筋障害とは異なる機序であるとされております。

心機能のモニタリングとしては、胸部レントゲン、心電図、心臓超音波があります。治療開始前に十分に心機能を評価したうえで、心臓超音波による定期的なモニタリングを行うことが推奨されます。